お護摩修行のおすすめ

皆様の諸願成就を祈願する

高尾山では大本堂に於いて、毎日御護摩修行を行っております。

お護摩修行とは、護摩木という特別な薪を大導師が御護摩の炎の中に投入し、あらゆる煩悩を焼き浄めるために行われます。そして、御信徒の皆様の祈りが御本尊様に届けられ、皆様の諸願が成就するという修行であります。

御護摩修行を済まされた方には、御護摩札が授与されます。

大切にお持ち帰り頂き、お供物と共に自宅等に奉安礼拝して、一心に御宝号「南無飯縄大権現」とお唱え下さい。

苗木奉納

古来より高尾山の御信徒は、自分のお願いが成就した時に感謝とお礼の意味を込めて、苗木を奉納するという習慣がありました。今日でも、お杉苗奉納は続いており、参道の大杉原には一年間掲示される杉苗奉納者の芳名板が、板塀のように並んでおります。

高尾山では寺法において「殺生禁断」を第一義に、むやみに草木を切ることを厳しく戒めてきました。私達は信仰心と共に大自然を守り、また大自然から守られつつ、共存共栄し、本日の景観を造りあげてきたということを、忘れてはならないと思います。

尚、毎年**十二月十日**までに、**一万円以上**を御奉納頂いた方のお名前を、翌年より掲示させて頂いております。

第九箇度 相州大山登拝修行のご案内

本年も当山恒例の相州大山登拝修行を左記の通り執行致します。皆様お誘い合わせの上、一人でも多くのご参加を、心よりお待ちしております。

日　時　五月二十六日(土)　二十七日(日)　※一泊二日

集合場所　高尾山麓不動院

参加費　三万円(往復バス代、保険代、宿泊費、その他諸費用含)

行　程
一日目　**高尾山内にて前行**
二日目　**大山登拝修行・阿夫利神社下社にて正式参拝**

申込方法　**住所・氏名・生年月日・年令・連絡先・緊急連絡先**を明記の上
〒一九三―八六八六　八王子市高尾町二二七七
「大本山高尾山薬王院大山登拝事務局」宛に
ハガキでお申込下さい。

申込締切　**四月三十日(月)　必着**

※参加申込ハガキが届き次第、請書、行程表、その他詳細をお送り致します。

お問合せ…大本山高尾山薬王院大山登拝事務局
TEL〇四二―六六一―二二五(代)

高尾山報助成金志納者
御芳名(順不同・敬称略)

八王子市　一般財団法人 高尾保養
甲州市　植野　幸子
さいたま市　鬼頭　宗良
伊勢崎市　田島　和穂
いわき市　石山　和義
大田区　金子　毅
横浜市　森村　美恵子
杉並区　西荻北高尾講
八王子市　小浦　泰晴
小平市　青木　勝
八王子市　秋間　薫
藤岡市　吉村　幸一
塩尻市　上條　仙昌
相模原市　遠藤　恵子
川口市　八木橋　弘子
柏市　北上　とも
八王子市　石川　光雄
世田谷区　近藤　徹
浜松市　㈱丸源竹内組
伊勢崎市　内田　國一
佐世保市　南　長男
日野市　中西　正夫
前橋市　狩野　陽一
葛飾区　遠藤　竹次郎
八王子市　㈱仲野電機製作所
〃　瀬沼　ミヨ子
川崎市　蓮　花寺
八王子市　吉田　利江
羽生市　米川　雅雄
八王子市　篠崎　寛治
八王子市　北区　遠藤　英子
比企郡　小鷹　健一
邑楽郡　今井　信幸
八王子市　㈲峰尾豆腐店
〃　冨永　博士
〃　大木　和子
本庄市　寺井　清
相模原市　大石　昌秀
鶴ヶ島市　高澤　登美子
八王子市　上野　千恵子
〃　平　林子
〃　秋山　諭
所沢市　豊田　勝己
羽生市　増田　久雄
伊勢崎市　岩村　ユキ子
加須市　馬橋　敬二
立川市　正楽院
八王子市　荻原　時次郎
大田区　高橋　勇
西東京市　中村　眞人
飯能市　土屋　眞一
茅野市　原　光男
児玉郡　上原　一夫
上尾市　森田　和子
横浜市　大江　泰子
八王子市　笠原　清子
松本市　小林　幸平
羽生市　吉田　文則
所沢市　富永　信雄
鴻巣市　石川　益雄
青梅市　梶野　嘉穂
伊東市　大江　弘
新座市　彰山　粧麗
富里市　森　照森
八王子市　小林　ヒサ子
熊谷市　妻沼飯縄講
〃　石井　淳
潟上市　小室　友悦
新座市　高橋　久子
佐野市　荒居　幸子
太田市　清水　紘一
相模原市　磯部　司郎
深谷市　中澤　裕一
入間市　北原　和男
児湯郡　彦坂　豊子
八王子市　春原　啓子
〃　上條　公子
〃　高橋　芳子
福生市　野中　数一
前橋市　高野　泰孝
秩父市　八木　孝一
八王子市　杉本　當正
〃　金子　喜美子
川口市　岡部　明美
日野市　岡田　志美子
八王子市　梅村　享志
船橋市　小淵　修二
郡山市　美濃部　良
八王子市　佐々木　美津子
品川区　芦澤　尹通
新宿区　三反田　すゑ子
高尾山健康登山者一同

高尾山の昆虫

ルリシジミ　101

長く厳しい冬が終わり春の訪れを感じる頃に、林の周囲をせわしなく飛ぶ小型で可憐な蝶に出会うことでしょう。

これはシジミチョウの仲間のルリシジミ（瑠璃小灰蝶）で、オスの翅の表面は清楚な青灰色、メスは翅の外縁部が広く黒褐色に彩られ、オスメス共に裏面は灰白色に細かな黒紋が散りばめられています。

昔からこの仲間の和名が何故シジミなのだろうかと思っておりましたが、翅の表側の色がシジミ貝を開いた時の感じに似ているところから来ているようで、確かに青白い発色はそれを思わせます。

本種は早春から晩秋まで年に数回連続して発生し、様々な環境においても姿を現わしますが比較的は林縁で見る機会が多く、人家周辺でも普通に見られるため、おそらく最も身近な蝶の一種ではないかと思います。

ところが何処にでも沢山いるということではないらしく、非常に少ない地域もあるようですから、こればかりは当の蝶に聞いてみないと理由は分かりませんが、高尾周辺では常連です。

（文 松島　孝　撮影　佐伯　元行）